

札幌報告会 2015 挨拶

平成27年8月20日

幌延深地層研究センター 所長 清水和彦

幌延深地層研究計画における平成26年度の調査研究の成果を報告書として取りまとめましたので、平成27年度の計画とあわせて報告させていただきます。また、報告に先立って、北海道大学の藤井義明教授に「人類と地下の未来」と題した特別講演をお願いしています。

まず、地下施設の整備状況については、昨年度、地下350mの深さに研究用の坑道を整備するための工事を無事に完了することができました。これにより、東立坑と換気立坑は深度380mまで、西立坑は深度365mまでの掘削が終わり、深度350mに全長約760mの水平坑道が完成しました。深度350mの水平坑道については、昨年7月から一般公開も行っています。

以前、坑道内の湧水 - 坑道周辺から染み出してくる地下水 - が大量に発生してご心配をおかけしたことがありましたが、これを抑制するために行った対策工事の経過も良好で、現在、坑道全体からの湧水量は一日当たり約90m³と、処理能力の750m³に対して、かなり余裕のあるレベルで安定した状態にあります。

研究開発としては、新しくできた深度350mの水平坑道において、実規模大の模擬人工バリアを使った性能確認試験や、安全性の評価に必要な岩盤や人工バリア中での物質の動きに関するデータを取得するためのトレーサー試験など、地層処分に直結した本格的な試験に着手することができました。

このように、幌延深地層研究センターの業務を円滑に進めることができているのは、北海道および幌延町における地元自治体ならびに地域の皆さまのご理解とご支援の賜物と深く感謝しています。

一方、実際の処分事業については、5月22日に最終処分に関する基本方針が閣議決定により改定されました。その中で、処分場の候補地については、国が前面に立って科学的により適性が高いと考えられる科学的有望地を提示し、関係する地方公共団体に協力を申し入れていくという方針が明確にされました。これを受けて、全国各地で一般の方々を対象としたシンポジウムや自治体への説明会などが行われてきていま

す。また、科学的有望地をどのように選定していくかについては、引き続き国の作業部会で議論が継続されているところです。

このような状況の中で、幌延深地層研究センターが今後とも研究開発の中核的な拠点としての役割を果たし続けていけるように、国の方針や処分事業の進展状況などを見据えながら、柔軟性をもって研究開発に取り組んでいきたいと考えています。また、研究開発を進めながら将来の計画についても検討し、平成31年度末までに、研究終了までの工程やその後の坑道の埋戻しなどを含む全体の計画を策定する予定です。

いずれにしても、研究を始めるに際して北海道および幌延町との間で取り交わした三者協定が大前提ですので、「放射性廃棄物を持ち込まない」、「研究が終わったら地下の施設は埋め戻す」といった約束をしっかりと守りながら公明正大に、かつ最大限の成果が得られるように進めていければと願っています。

今後とも、安全を第一に情報公開を徹底させながら、着実に研究開発を進めていきますので、引き続き、ご支援・ご協力を賜りますよう、よろしく申し上げます。

以上